

検証・大阪ブランド **スポーツ**

北京オリンピックにかける 大阪出身のアスリートたち

代表入りが続々決定

北京オリンピックの開幕が迫るなか、大阪出身のアスリートたちへの期待が高まっている。2008年4月現在で、トランポリンの上山容弘選手(大阪体育大学大学院)、シンクロナイズドスイミングの橋雅子・小林寛美両選手(浜寺水練学校)、小村恵里佳選手(井村シンクロクラブ)、マラソンの大崎悟史選手(NTT西日本)、馬術の杉谷泰造選手(杉谷乗馬クラブ)、アーチェリーの守屋龍一選手(ミキハウス)、水泳の中西悠子選手(枚方SS)、奥村幸大選手(イトマン)、藤井拓郎選手(コナミ)、入江陵介選手(近畿大学)、三田真希選手(コナミ西日本)、テコンドーの岡本依子選手(セレクション)、柔道の石井慧選手(国士舘大学)らが代表入りを決めている。

かつて大阪の存在感を示したスポーツに、女子バレーボールがあった。大松博文監督率いる日紡貝塚(当時)チームは、1961年のヨーロッパ遠征で24戦無敗。あまりの強さに欧州のマスコミから『東洋の魔女たち』と恐れられ、多くの選手が東京五輪(64年)で金メダルを手にした。貝塚市の体育館で行われた猛練習は、いまや伝説となっている。それから40数年。大阪から発祥して日本中に広まり、その強さを世界に誇っている競技にシンクロナイズドスイミングとトランポリンがある。

常勝軍団 — シンクロナイズドスイミング —

日本のシンクロナイズドスイミングは、国内初のスイミングスクールといわれる浜寺水練学校(毎日新聞社主宰/1906年創設)が起り。公式に披露されたのは1954年の奈良国体が最初で、70年の大阪万博では国際大会が招聘され、“浜水とシンクロ”は広く内外に知られることとなった。84年のロサンゼルス五輪では、同校出身の井村雅代コーチが指導した本間三和子(旧姓元好)、木村さえ子両選手が日本人初の銅メダルを獲得。以後、ソウル(88年)、バルセロナ(92)、アトランタ(96年)と続けて世界3強入りを果たし、シドニー(00年)、アテネ(04年)では、デュエットの立花美哉・武田美保両選手をはじめ、チームを銀メダルへと導いた。

一切の妥協を許さない井村式の猛練習は、東洋の魔女を育てた大松監督を彷彿させた。シドニー五輪前、選手に向かって「私たちはオリンピックに参加する集団ではない。金メダルを狙って戦う集団だ」と宣言したのは、自信の表れにほかならない。結果は「銀」だったが、01年の世界選手権大会では、立花・武田両選手が見事世界の頂点に立った。北京オリンピックでは、新たな選手たちにメダルの期待がかけられている。



上山容弘 選手
個人競技・世界ランキング1位(2008年4月現在)

世界ランク1位の快挙 — トランポリン —

大阪にトランポリン協会が設立されたのは1978年。以来30年にわたる普及活動と数々の大会を開催し、日本の競技レベルを牽引してきた。通算44回の全日本選手権中、大阪は男子19回、女子10回の優勝を記録。そうしたなかから育ってきたのが、廣田遥選手(阪南大学職)や上山容弘選手である。

「世界レベルの選手が、しかも男女揃って大阪から育ってきたのは本当に幸せなこと」と話すのは、大阪府トランポリン協会の岩下眞樹理事長。1980年の世界選手権大会(スイス)に出場し、日本人初の銅メダルを獲得したその人である。

トランポリンがオリンピックの正式種目になったのは、シドニー大会から。廣田選手はアテネ大会で7位入賞を果たし、上山容弘選手は、05年の世界選手権大会(オランダ)で個人・団体で銀、シンクロで銅メダルを獲得。岩下さんの記録が25年ぶりに塗り替えられ、大阪はもちろん日本のトランポリン界がこの快挙に沸いた。さらに07年の世界選手権大会(カナダ)で、外村哲也選手(東京)と組んだシンクロナイズド競技で優勝。日本トランポリン史上最高を記録し、早々と北京代表入りを決めた。一方、女子枠[1]を狙う廣田選手は、4月17日の2次選考会で1位の半本ひろみ選手(金沢学院北国クラブ)とわずか0.1ポイント差で2位。五輪2大会連続出場をかけ、6月の最終選考会に挑む。

大阪が生んだシンクロナイズドスイミングとトランポリン。今年の夏は、北京から目が離せない。